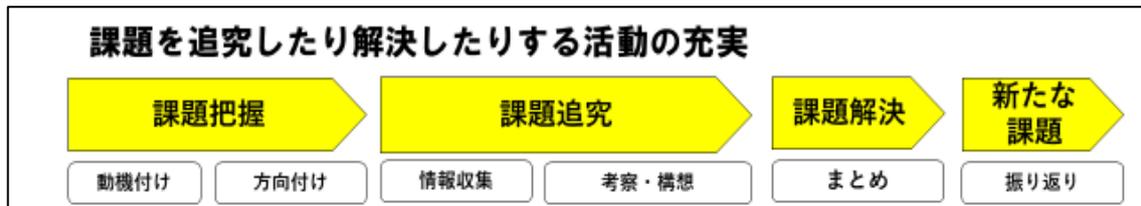


社会に参画する態度の育成

小学校社会科の目標より

(3) 社会的事象について、よりよい社会を考え主体的に問題解決しようとする態度を養うとともに、多角的な考察や理解を通して、地域社会に対する誇りと愛情、地域社会の一員としての自覚、我が国の国土と歴史に対する愛情、我が国の将来を担う国民としての自覚、世界の国々の人々と共に生きていくことの大切さについての自覚などを養う。（下線部筆者）

新学習指導要領では、単に知る・わかるだけでなく、社会的事象のもつ意味を熟考し、それに対する自分なりの意見や考えをもち、それを表現しながら社会への参加・参画を考えていこうとする子ども像が求められています。



単元のまとまりの中で、特に終末で社会との関わり方を問うことが効果的



社会との関わり方を問う ※当事者意識を育てる「問い」の例

- ① 予測される社会的事象を問う
 - 「もし、ごみの出し方にきまりがなかったら、どのような問題が起きるか」
 - 「森林が減ったらどのようなことが起きるか」
 - 「このまま食料自給率が下がり続けたら、どのようになるか」
- ② 選択・判断を迫る
 - 「あなたがスーパーマーケットの店長なら、どの工夫を一番大切にするか」
 - 「どのような分野に財源を多く配分すべきか」
 - 「〇〇市に引っ越したい人たちにおすすめの地区を PR するとしたら」
- ③ 視点を変える
 - 「雪の多い地域は住みにくいのだろうか」
 - 「本州四国連絡橋は四国の人々にとってよかったのか」



課題を追究することにより、実は課題解決は容易でないことに気付くことに価値があると言えます。

「ごみ処理の問題」を例にすると
⇒「自分にできることは？」 「これからは、何が必要なのだろう」



社会に見られる課題の解決にどのように関わっていくかについて、考え始めるきっかけとなる。課題について「問い」続ける態度を育成することが社会参画につながる。